

川出麻須美の詩歌

夜久正雄

川出麻須美といふ歌人の名を知る人は少ない。文学辞典・和歌辞典の類にも殆んど録されてゐない。明治書院の「和歌大辞典」に、広瀬誠氏の筆になる「川出麻須美」の一項の載つたのが、唯一の例外であらう。

「川出麻須美かわでますみ」明治一七。別称は鹿背渡しかせわた。愛知県生。東京大学卒。明治四四、三井甲之主宰の『アカネ』のちに『人生と表現』の同人となり、短歌・長詩・劇詩などを発表。大正中期から次第に甲之らと遠ざかった。詩歌集に『天地四方』昭和篇昭和二八・『天地四方』明治篇昭和三二などがある。(広瀬)

略歴を補足すると、次のごとくである。芳賀矢一の教え子の一人として明治四十二年東大卒、郁文館中学・浦和中学・富山中学・小田原中学の国語教諭を経て、大正十年第七高等学校教授となり昭和十九年まで、二十数年にわたり鹿兒島を第二の郷里として青年教育に従事された。昭和十九年退職、郷里の小坂井に帰郷され、(以上、「天地四方」昭和篇所載広瀬誠撰「川出麻須美年譜抄」に拠る。)のち、愛知大学の教授となられた。昭和四十二年五月二十四日、八十三歳を以て長逝された。私は縁あって若年から先生の詩歌に親しみ、歌の師と私淑し、詩歌集「天地四方」(昭和二十八

「昭和篇」、三十二年「明治篇」の編集発行にたづさはったので、こゝに追悼の心をこめて先生の詩歌紹介の一文を草する次第である。

「天地四方」明治篇は主として広瀬誠氏の編纂にかゝるものであるが、短歌篇と詩篇との両篇から成つてゐて、その短歌篇の前半は、著者自筆自編の歌集「鹿背渡第一集」に拠つたものである。——「鹿背渡」（しかすがわたり）は著者当時のペン・ネームである。その「序」には、「これらの和歌は明治四十二年六月より翌年二月に至る八ヶ月間に作られ公表せられたるものなり。」とある。作者の東大国文科在学中、二十五、六歳の作といふことになる。明治篇・短歌篇の冒頭は、「ゆふごち」といふ題の五首の連作短歌である。

ゆふごち

かくひどりくもぬちにつきこもるらし小雨ふる上野の岡のあかるくおもほゆ

ひとの世のどよみのうちに哀かなしもよ蚊喰かぐひら鳥なく谷中のかたに

月星のほへる空をながむれば身ぬちしまりてうらがなしもよ

檐えんさきにいもとならびてもだにぬし夜らを思へば死ぬべくおもほゆ

いもとわがながめしすもは萌えいでゝゆりてあるらむこのゆふごちに

これは根岸短歌会「アカネ」第式巻第六号・明治四十二年七月一日発行号に「公表」されたものである。ただし、発表当時のものには振仮名はない。「天地四方」発行の時に編者が著者に相談して付したものである。以下同じ。「序」の「六月より翌年二月に至る八ヶ月間に作られ公表せられたる」ということからすれば、六月に作られ七月号に発表せられたものであらう。もっとも「アカネ」所載の「ゆふごち」は、一連九首となつてゐて、「天地四方」

所載の次の「歯痛」四首と一緒にしている。原理日本社発行しきしまのみち会編「国民同朋和歌集」明治篇も「アカネ」を踏襲してゐるが、これは、作者の自筆稿本に拠った「天地四方」の「ゆふごち」五首「歯痛」四首を正し、とすべきであらう。

正岡子規の開いた連作短歌は、子規系歌人の作歌の特徴である。川出麻須美歌集が冒頭から連作短歌になってゐるのは、まづ作者の精神の系譜を語るものである。また、「アカネ」所載の作を以て、自筆稿本歌集の冒頭の歌とした作者の自覚には、当時「アカネ」を主導した三井甲之の影響を徳とする心があらはれてゐる。昭和三十一年八月十六日に書かれた「天地四方」明治篇の序に作者はかう書いてゐる。

「……前に一言も触れなかつた今は亡き三井甲之君に対し深い感謝の意を表さねばならぬ。三井君と相知つたのは私が大学在学中の事であるが、それは私の一生中大きな出来事であつた。私の自然に対する一如の感、謹直な父と情熱的な母の感化、明治天皇への帰依、正岡子規岩野泡鳴の影響等に依つて用意され鬱積された私の魂に点火したのは三井君であつた。」

これは、数十年を経て當時を回顧した一文であるが、明治四十三年の自筆稿本「短歌篇旧序」には次のとほりに書かれてゐる。

「いのちに満ちたる一刹那の感情を具体化するとき簡単なる詩形となるは自然なり。三十一字の和歌の生命ここにあり。しかるに複雑なる感情を表現するに一首の和歌を以てせむとせば生命の律動を破壊するに至るべし、和歌の連作はこの関点を避けむがために必要なり。感情の自然を重んじ和歌研究に出発せる詩人は必ず連作に進まざるを得ず。(以下略)」

また、「鹿菅渡歌集第一集序」に、

「古代語を用ゐしは余の思想感情これが必要としたればなり。言語を時代によりて区別し、その一を選ばむとする
ごとき愚昧なる主義は取らず。

すべて實際の経験をうたひたり。断片的生命のうちに一貫せる精神を認めむとつとめたり。」

「古代語」というのは、古事記万葉の言葉という意味でらう。原初的古代精神への憧憬は作者の生涯を貫く精神であつたが、それは、少年時代からの万葉集への傾倒にもとづくものであつたといふことである。かうして、川出麻須美の明治時代の短歌が作られたのである。一首のすみずみまで行き通る言葉の力強さは無類独特で、言葉に粘着力があつて、息切れがない。生の生命そのものの躍動が言語にあらはれる。そこに全精神の集中がある。「航海」二十七首は当代不滅の代表作であると思ふ。

航海

あま雲をもる日かそけく碇まく音かなしもよ別れゆく身は

港べに妹は来ねどもいづべゆか見つゝあるらむ出でゆく船を

かなとでに妹がわたせしふみよめばやさしことのは見るに堪へずも

火を噴きし昔ゆめむか開聞のみ岳もだせりゆふべの空に

佐多の門に船ちかづけばおほなだの俄にかたぶき疾吹くあま風

海角にかぐやくともしあな悲しゆらぎだにせず荒海にむかひて

かたぶける筒ゆふき出すくろけむのふとくよこたふけはしきうなづら

笛ふきて駛せすぐ船はこの夜らを入りて泊つらむかの港べに

秋冬のながきいたづき護りし子にかく別れゆくなにのさがぞも

目にちかき日向つら山とのぐもりかなしきかもよ駛せゆく我船

ほのぐらき室にいぬれば船のへにくたくる浪の音のかしこさ

ひとごとと心いためてかにかくに訴へし妹が姿しぬばゆ

ひと恋ふる心さげすむ支那人の教に死せるくにびとあはれ

油津に船つきぬらし夜ごもりに汽笛しば鳴りあたりさわがし

うまし夜のさぎりわかれて朝北のひたふく海原日かげさし出でぬ

海のいろ白帆とぶかげながめつゝゆらく心のうつゝともなし

速吸の追戸をめぐれば妹がある筑紫の山はうすれゆくはや

酔ひし人むらがり出でゝほめそやす池なす内海見るもうるさし

さ夜ふけて風ふく海にみだれあるこのあま船神護りたまへ

妻子らにとほく別れてよもすがら播られゆきけむいにしへびとはも

こき水をゆたに湛へてとこしへにゆらめく海よわれは泣かゆも

このふた夜海にあかして我港ちかづきくれど楽しくもあらず

明石門に我船入ればすゝけぶり空になびきてもゝふねつどへり

呼びかはす汽笛かなしく船の上のあわただしきも夢かと思ほゆ

ふるさとに父母待ちまさむ別れ来しかの子はひとり泣きてあるらむ

行李もちなづみてゆけばやちまたに雨そゝぎ来ぬほこりあげつゝ

あめつちも我を苦しむるかよしさらば小雨なにせむどよもせいかつち

〔国民同朋和歌集〕明治篇所載
「ゆらめく海上」はあやまり

この航海は小生の一生忘れがたきものに有之候、当時の手記を読み徹夜して作りしものを直したるものに御座候、其為却つて生氣を失ひし恐有之候、始めは七十首ちかく有之しが除去致候。

一般に後世作の万葉調の歌といふものが、とかく万葉語の形式上の使用に流れてかへって眞実の表現に欠けるところがあるのに対して、川出麻須美はじめ「アカネ」の歌人たちの歌には、痛切な体験の裏づけがあり、切実そのものの表現とみられるものが多い。当時、その主導的地位にあつた三井甲之は、それらの歌を「人生の血を以て書かれ、生命を費して歌はれた」「深刻の歌」と評した（「アカネ」第参巻第壹号・タブロイド版、明治四十四年五月十日発行号⁽⁵⁾）。古代日本語を活用して強烈な情意を唱ひあげたこれらの連作短歌は、正岡子規の「強き和文」（明治三十二年）に対する憧憬に連るものであらう。

明治篇短歌篇の最後は次の歌である。

貨車

構内に貨車おすひとびともろ声に押せども押せど車うごかず
ひく波のよせくるちから呼吸^{いき}あはせ押すよをのこはおのれを信じて
夕やけの空にまくろぎすゝ貨車のやゝにゆるぎづいや押せ人々
ぬかに立つ汗もな拭きそこのはづみはづさはまたもとまらむ車
音たてゝゆるぎづ車はしりつゝ押しゆく人らちちどきたかし
ほのぐらき倉庫に車おししづめ人わかれゆきぬさむきちまたを
夜に入れば汽車もかよはぬ田舎^{いなか}まち音なき空にしげき星影

特に「古代語」としてあげるべき単語は、「もろ声」「ゆるぎづ」「ゆるぎ出づ」「ぬか」くらゐのものであらう。古代語は完全に作者の血となり肉となつてほとんど痕跡をとどめない。しかし、歌全体の調子は強くしなやかで、万葉の歌に此肩しうる。子規の万葉復活と写生とは、このやうな歌に結実したと言へるのではあるまいか。内容的にも、「航海」の恋愛に対して「貨車」は国民同胞感を主題にしてゐる点、躍動する明治の精神の表現である。

同じ頃の歌に「辞書」といふ歌があつて、作者の言葉、葉に対する思想を表現してゐる。また同時にこの歌は作者の思想的短歌への開展をも示すものである。

辞書

火をよせて辞書よむたのしさくさぐさの命みなぎるやまとのことば

とびすぐるよろづのことば雨風にうたれて野なかずゆく思ひ

厚き書ふみにたゝまることばくりひろげ国のおほ歌つくる人なきか

ふる言を死せりといふか祖たちのいのちのしるし死せりといふか

ふる言にこもる力のとこ清水汲めどもつきずふる言あはれ

さて「天地四方」明治篇が、短歌篇と詩篇とから成ることは既に述べたが、作者は、自ら「つちごと第二集」といふ詩集の稿を作り、その序に、前記歌集の「のちをうけ、断然、現代語をもつて、自由に感想を発表せしものなり。この小詩集は明治文学史上に一新時期を劃するものなるを信ず。」と、書いてゐる。三井甲之が連作短歌から長詩へむかつたのと平行して、連作短歌から口語自由詩にむかつたのである。紙面の都合で長い詩を引用できないが、日本武尊を詠んだ「手紙」とか、「三角洲にて」「農民のうた」等、短歌に見られると同じ力強

い日本語の詩的生命が脈うってゐる。「手紙」の中で日本武尊の「いのちのまたけむひとは」の歌を引用して、

「この あたたかい ハートと、

執着の おそろしい ちからとは、

白鳥と なって かけら ずに をれると おもふか。」

とうたひ、

「みことは ぼくが かく、

みことは 死んだと いって も、

ぼくの あたまに いきとる。

ぼくは それを 産出する のだ。」

とうたふ。古代精神の表現者としての日本武尊に親近肉迫する情意の高騰を表現する言葉である。次に短い詩を二、三あげて、詩の一端を見るよすがとしたい。

河口にて

しほが そこって、

しづんだ つゝみが

もちあがつて きた。

こゝろまきは

よしの あひだを

のたり あるいて、

あしのところい

およいでくるのを、

ちよい、ちよいと

くってをる。

説くもの

説くものよ、

ほろびよ。

つよし

やはらかし。

ゆゑに、

つよし！

この最後の詩は、単なる逆説ではない。作者の人生観生命観の本質である。作者がこの詩集を作ったのは、明治四十五年一月一日の序のあるところからして、明治四十四年のことと考へられるが、それから約二十五年して、昭和十年「をりをり草」に、

くろがねも断つとふ太刀はそのやき刃やはらかにして缺けず碎けず

といふ思想的短歌がある（「天地四方」昭和篇）。一貫する思想の表現である。

さて、三井甲之にはゲーテの訳詩があるが、川出麻須美にはホイットマンの訳詩が、一篇ある。

訳詩来るべき詩人に（ホイットマン）

1 地球、まるく、ころがり、うちにこもった——無数の太陽、月、動物、すべてこれらは将来のことばである。水のやうな、草木のやうな、蜥蜴のやうな進行——實在と予言と未来のさくやき。みよ！これらは将来広汎なことばだ。

2 きみはかんがへてゐたか、これがそのことばだと、こんな直線とか曲線、角、点などを。

ノー、こんなものはそのことばではない——真のことは土のうちにあり、海にあり、それは空中にあり、それはきみのうちにある。(以下略)

この訳詩は、ホイットマンの原詩の調子を訳者が完全に自分のものにしてゐるやうに思ふ。ホイットマンの詩を日本語に訳した人は数多いが、これはその訳詩中の傑作だと思ふ。原詩は「草の葉」(Leaves of Grass) 一八六〇年版の To the Sayers of Words である。この詩は「草の葉」完成版の Variorum Readings に拠ると、最初すなわち一八五六年 Poem of the Sayers of the Words of the Earth の題で発表され、一八六〇年前記、一八七一年 Carols of Words 一八八一年以後 A Song of the Rolling Earth と題して、今日われわれの一般に見る内容になったといふことである。したがって、他の訳詩とも、原詩とも対照しにくい。たまたま一九二〇年ロンドン刊行・ロゼッティ編輯の Poems by Walt Whitman ⁽⁹⁾ は、一八六七年十月の序がついてゐて、一九六〇年版の題による原詩を載せてゐる。川出麻須美訳は、この原詩に拠つたものと考へられる。今日では、完成版が行なはれてゐるのでこの原詩との対照は面倒だと思はれるから、冒頭の部分だけ繁をいとせず引用しておく。訳詩は原詩二章の途中までを十一節(1—11)にわけてゐる。そのうちの二節(1・2)である。

Earth, round, rolling, compact—suns, moons, animals—all these are words to be said ;
Watery, vegetable, sauroid advances—beings, premonitions, lisplings of the future,
Behold ! these are vast words to be said.

Were you thinking that those were the words—those upright lines ? those curves, angles, dots ?
No, those are not the words—the substantial words are in the ground and sea,
They are in the air—they are in you.

明治篇詩篇の最後の詩は次の「暗夜」である。長いので、全文は引用できないが、

「あゝ詩はほろびた、日はしづんでしまつた。

としよりも子供も、男も女もみなそれを知つてゐる。」

一行ではじまり、

「人は暗黒と、涼気に蘇生して、

自己の創造に入らうとするか。

あゝ急転する地球の風よ！

ひらく胸にも響をつたへて

われはとびあがる

行くものは行けよ！

悲し悲し人の世はかなしきかな。」

に終る。「人生と表現」大正一年九月号発表といふから、明治天皇薨御の悲しみを歌ったものにちがひない。三井甲之「九月十三日」に相応するものである。「九月十三日」は次の一節で終る。

「みちのべにみてる民らよ

剣とりつゝなめて立つつはものよ

なが心かなしまむ。

遠きむかしのことそぎてちからあるみ魂よ今よみがへれ、

あゝわが心かなしなみだのごはむああ。」(詩集「祖国礼拝」所載)⁽⁷⁾

川出先生は、昭和二十三年私が訪ねた時、明治天皇御大葬の御霊柩車の悲壮な轍の音を音声で真似してみせられた。思想の根源にかかはる深い体験であったのである。

三井甲之は、前記「九月十三夜」にあらはれた明治天皇奉悼の心持を明治天皇御製の研究に開展して、大正元年八月「日本及日本人」に「先帝の御製」を発表し、⁽⁸⁾大正十一年宮内省蔵版文部省発行の「明治天皇御集」に拠って、大正十二年十二月「祖国礼拝国民宗教経典明治天皇御集拝誦宣言」を脱稿し、⁽⁹⁾大正十四年「日本及日本人」に「明治天皇御集研究」を連載し、整理補足して、「明治天皇御集研究」を著した。⁽¹⁰⁾

川出麻須美は大正期に入って、詩、劇詩、小説の創作活動に没頭し、「人生と表現」の同人として同誌および「日本及日本人」に多数の作品を発表して、三井甲之の研究論文に対し創作面を担当するかの観があったが、大正五年「人生と表現」廃刊の頃から、中央文壇歌壇への発表を絶って、七高教授として教育に専念する。大正期の作品についてはまだ整理がついてゐないので、論及できないが、詩・小説・劇詩へと多方面にわたって爆發させた創造的なエネルギーを、昭和期に入ると、再び連作短歌形式に統一した。昭和期の作品は、

あめりかよろしやのちからとりすべて立ちあがる日本の神を信ぜむ

の一首にはじまる、連作短歌中心にかへる。その中に、昭和六年「明治神宮」と題する次の四首は、「暗夜」につづく信仰の告白である。

打ちなびく木の枝すがしく遙々に鳴く夕鳥の声のともしき

夕日いま木の間にひくゝみどり葉のさやぎたふとき神の森かも

隼人のさつまの国ゆのぼり来てひとりかなしもみ前をろがめば

つゝしみてをろがむ人らなつかしくまかり出でけりいさごふみつゝ

大正十年七高教授として鹿児島に赴任してから昭和十九年七高を退職して帰郷するまで、二十年間にわたる川出麻須美の活動は、教育と自然と和歌とであったといへよう。和歌の発表も、主として七高の校友会雑誌などに限られてゐる。昭和十七年十八年の歌の中の「折にふれて」三首中二首その他がその間の消息をよく物語つてゐる。

物皆のいのちなつかし手にとればリズムを奏づこの手なうらに

歎けどもかひなき世なり思ひ直し羽根みぢかなる雛を育てな

○

若人ら居らざる時は徹底的に自然の中に我生くるなり（昭和十一年「夏雑詠」中）

青年は愉快なるかな風の日は平生よりも出席多し（昭和十七年十八年「颯風」中）

平らかに眼あきらめきはめつゝ信ずるところを行へとおもふ（昭和二十一年「青年らに」一首）

また、昭和二十三年一月の「手のひら療治」の歌は、(一)八首(二)十一首から成り、最後に

かくり世の廿七年今しはとおそるおそるも歌によみおく

に終るのであるが、その(一)の第二首

注ぎくる大御光に燃え立ちてもろ手おのれと揉みつゝあがる

の、「大御光」は、作者の明治天皇への信仰をあらはしたものであるとのことであった。三井甲之に「手のひら療治」の著書があり、明治天皇御製拝誦がその修業の中心となつてゐることと併せ考へると、川出麻須美の性格があくまで具体的行動的であつて、思想の一般化への道をとらなかつたことがわかる。しかし、三井甲之の研究論文の開展に平行する体験の直接的表現が川出麻須美に見出されることは神秘的にさへ思はれるのである。

明治末年から大正へかけての口語自由詩から連作短歌への回帰について、川出麻須美自身は次のやうに語つた。——自由詩を作つてゐると、詩のリズムが身体にのりうつて来て、からだが躍り出すのであつた。これではたまらんと思つて、自由詩をつくるのを断念した、と。

大正時代の詩作の体験を経てのちの作歌は、次第に思想的になつて、思想詩としての傑作を数多く残すこととなつた。中でも、昭和十一年、鹿児島にあつて二・二六事件を詠んだ四十四首のごとき、時勢人心の危機を痛嘆してあますところがない。他の思想的短歌を思ひつくまゝに数首引用して本論を終る。

破壊して利用する科学が人生の王座につくとき禍おこる（昭和五年発表、「折にふれて」）

皇神は御子下しませり清き故になやむ皇国に御霊添ふべく（昭和八年、「皇太子殿下御降誕をことほぎまつりて」三首）

大倭あぐる歓呼をよものくにきゝつゝいましなに念ふらむ

古へと来む世とを現在にとりすべてわき興る皇国のすがたうれしも

とこしへの道は神意をかしこみて物をめぐむに在るべかるらし（昭和十年、「をりをり草」）

休みなく堅くつめたく涙なく機械はめぐるとどろきながら（同右）

一切の作ゐをつゝしみおのづから吹く神風に起つべきものを（昭和十一年「友に」より）

高空はつね晴れたりき大地は雲はびこりてやまず動けど（同）

物みなのかなやみ集まる現し身を投げ出し生く天のまにまに（同年「返し」より）

世にあるもなきも同じぞたまきはる命はかよふ万代までに（同）

物いへば命かぎらるいはざれば無にひとしきを如何にか吾せむ（昭和十三年「昔の歌」）

逞しく哀しきみたましぬびつゝ千二百年後の世にわれ生けり（昭和十三年「柿本人麿三首」）

鳴りひびく大きみたまはとこしへに大和の民と共に滅びず

おほつちに足ふみ立てゝもろうでを天に伸せる人の姿か

事はみな成すにはあらず神ながら成るといふことをつゝしみ思はむ（昭和十七年十八年「折にふれて」より）

「明るく」とゲートルはいへりチャーチルは「もう沢山」と「ねむたし」か我は（辞世の歌）

老いの坂のぼるがまゝにひらけくる視野花々と天につらなる（昭和四十二年賀状に）

極まればまたよみがへる道ありて生命果てなし何かなげかむ（墓碑銘の歌）⁽¹¹⁾

注

(1) 川出麻須美詩歌集「天地四方」明治篇（川出麻須美著昭和三十二年一月一日発行・限定版、広瀬誠・内藤康・夜久正雄編

輯）

(2) 同昭和篇（昭和二十八年十月二日発行）

(3) 「アカネ」（根岸短歌会出版部発行、第貳卷第六号、文芸雑誌型の最終号。明治四十二年七月一日発行、編輯兼発行者三井

甲之助。

- (4) 「国民同胞和歌集、明治篇」(しきしまのみち会編、昭和四年九月一日発行、編輯者田尻弥七、発行所原理日本社)「附記」によれば「明治三十八年より明治四十五年に亘る、主として雑誌『日本及日本人』歌欄に於ける三井甲之氏選の多数の歌及び歌人の一斑を示すものである。雑誌『馬酔木』及び『アカネ』の歌も少数取められてをる。」とある。
- (5) 「アカネ」第参巻第壹号・タブロイド型(前記根岸短歌会発行「アカネ」は各冊約六十頁の文芸雑誌型のもので、四十一年二月初号から第二巻第六号に至る十八ヶ月刊行を継続し、一時休刊状態となったが、明治四十四年五月を以て、タブロイド型「アカネ」第参巻第一号として復刊した。
- (6) "POEMS by WALT WHITMAN". Selected and Edited by W.M. ROSSETTI. London. CHATTO & WINDUS: 1920.
- (7) 「詩集祖国礼拝」(三井甲之著昭和二年十一月三日発行、原理日本社)
- (8) 「新公論」第四号(昭和二十八年十月一日発行)「三井甲之追悼特集号」所載宮崎五郎氏編「主要著作年表」に拠る。
- (9) 「明治天皇御集研究」(昭和三年五月、東京堂書店発行)序論
- (10) 同前「はしがき」
- (11) 「事はみな成すにはあらず」までの引用は、「天地四方」昭和篇より、(辞世の歌)以下の三首は月刊「国民同胞」第七〇号所載、拙稿「川出麻須美先生」参照。

筆者は本学教授・国文学